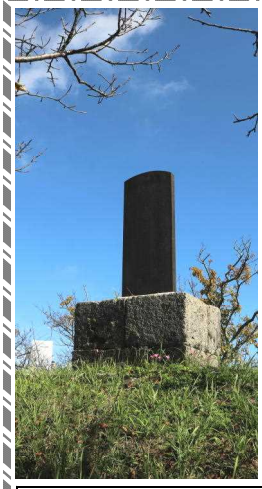
成長・貢献・感謝

これまでの羽地を学び、これからの羽地を発信する

羽地中学校
学校だより 99 号
R1. 9. 25



1年生は19日（木）、羽地地域の自然や歴史、文化に係わる産業や史跡を訪ね、地域への興味・関心と愛着を持ち、地域に貢献し提案することを考える「地域めぐり」を実施しました。

バス4台に分乗し、改決羽地大川碑記、金川（カニガー）銅山跡、親川城跡、田井等の壕、勘手納港、仲尾トンネル、ライスセンターをローテーションで巡りました。

案内役には、名護商工高校の観光課コース8名の生徒さんらが導いてくれました。クイズを出題するなどして、分かりやすく工夫して説明してくれました。名護商工の先生や生徒の皆さん、ありがとうございました。

午前中で地域めぐりを終えた1年生は、午後には学んだことをまとめ、新聞を作成して伝えたり、発信していく予定です。

羽地めぐりを実施する未来の生徒や地域に向けて、新たな地域の在り方「羽地の未来」を提案してくれるものと期待します。

金川銅山跡・仲尾トンネル

羽地・伊差川では、昔、銅が取れていた！。首里円覚寺の大鐘は、この銅山から出た銅で鋳造されたものとして伝えられている。

明治20～30年代半ばまでに盛んに採掘され、一時中断するも、大正2年に再採掘が始まり、一日に長さ約45㎝、幅16㎝、厚さ4・5㎝の銅の棒が3個生産されたそうです。

現在は、採掘跡が3カ所ほど残っているようですが採掘はされていません。碑のまわりには鉱石が飾られていました。

親川グスクは今帰仁世の主の弟である湧川按司の子・怕尼芝（はにし）によって築かれたとされる。当初は、羽地川の川上集落の、南側山腹に親グスクを築いて居城したとされるが、勢力を蓄えた後に今帰仁城に攻め入り、今帰仁城を手中に収め、後北山初代の王となったとある。

現在の親川城跡は、石碑が建っているのみで、石垣や城壁を見ることは山林の藪の中では厳しい。

一七世紀に編さんされた『琉球国高究帳』によると、羽地間切の石高は、1,998石、うち米は、1,817石なのでほとんどが稲作によるものでした。

米は仲尾次村の蔵に一時保管され、上納米として勘手納港から薩摩に出航していた。米を勘定（かんじょう）することからカンテナ（勘手納）の名がついたのではないか。

（羽地村誌より）

一石は150㎏、180リットル、ドラム缶は約200ℓなので、約1本分に相当。ドラム缶約1800本分のお米が収穫できたということ。イメージできますか？。

仲尾トンネルは、大正8年（1919年）8月に開通した沖縄では初の手堀りトンネルです。トンネルがない時代は、仲尾村に行く道のりが厳しく、迂回路だったそうですが、村の方達総出でトンネルを掘り続け、ついには完成したそうです。幅6メートル、高さ6メートル、長さ30メートルのアーチ型のトンネルを抜けると、美しい羽地内海が飛び込んできます。今年は、100周年になる祝賀会も開催したとのことです。